



茶縁むすび／政所茶生産振興会

山形 蓮 Yamagata Ren

株式会社モルテン

笹原 大 Sasahara Dai

2022 FEBRUARY

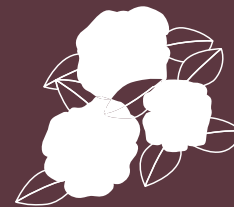
08

地
繋
人

卒業生の今



USP ★
STARS
08
2022
FEBRUARY



滋賀県立大学 OBOG Magazine
県大の星 第8号

発行月 | 2022年2月
発行 | 滋賀県立大学 経営企画課
〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町 2500
Tel.0749-28-8200 Fax.0749-28-8470



- CASE -

01

地 繋 人

何事にも挑戦する姿勢が
政所茶との出会いにつながり
人生を変えるきっかけに

Yamagata Ren
山形 蓮
ちゃえん
茶縁むすび(個人事業主)
代表
政所茶生産振興会
理事



県大の星

地繋人



キャンパスは琵琶湖。
テキストは人間。

このモットーを胸に
社会で活躍する卒業生の原点に迫るインタビュー

つながりが育む 社会を動かすチカラ

今回お話を聞いたのは、
若くして個人事業「茶縁むすび」を設立し、
近江三大茶の一つ「政所茶」の
次世代継承に取り組む山形 蓮さん。
競技用ボールを開発する株式会社モルテンで、
世界を股にかけながらスポーツを通じて
社会課題の解決を目指す笹原 大さんです。
同じ学部を卒業したお二人。
一方は地元・滋賀に残り、一方は海外で活動するなど、
拠点とする場所は正反対ですが、
何事にも挑戦するチャレンジ精神と
地元や海外でのつながりを活かして
それぞれのフィールドで活躍しています。
人と人をつなぎ、思いを次代へとつないでいくお二人の原動力と
将来の展望について語っていただきました。

学生時代に生まれた
地域社会への関心

滋賀県育ちの私は、大学もできるだけ実家から通える距離がいいと考え、滋賀県内での進学を目指しました。いくつもある大学の中でも滋賀県立大学を選んだ理由は、他学部の講義を自由に受けられる環境に惹かれたからです。私は文系として地域文化学科に進学しましたが、入学後は理学系学部の環境科学部の授業も履修することで、かねてより興味があった環境問題について学びを深めていきました。

ターニングポイントとなったのは、1年次で履修した「琵琶湖文化論実習」。私はこの授業で、担当の先生から「あなたの地元の魅力とは」という問いを投げかけられたのです。高校生までは授業や部活で土日も忙しく、地域社会とのつながりはほとんどありませんでした。先生の問いにうまく答えることができなかった私は、「自分は地元について何も知らない」と実感。ショックを受ける一方で、地域社会への理解を深めたいと考ええるようになりました。

「くつきチーム」で育まれた
最後までやり遂げる姿勢

1年次からは近江楽座「くつきチーム」に参加。最初のオリエンテーションで代表に抜擢されたこともあり、4年間のほとんどをチームでの活動に費やしました。1年目の5月に、近江楽座のプロジェクト審査会でプレゼンテーションを行う必要があったため、発表資料の作成を開始。しかし、入学して間もない私はパソコンの使い方も全くわからない状態でした。そのときにお世話になったのが生活デザイン学科の先生です。右も左もわからない私に基礎から丁寧に教えてくださいました。滋賀県立大学は小規模だからこそ分野を越えた交流が可能です。1年次から研究室に入力できる大学はなかなかありません。だからこそ、他の人とは違う学生生活になったと感じています。

先生方も学生の意見を尊重し、一方的に指導するのではなく見守ってくださる方が多いです。そのため、くつきチームの活動もメンバー同士で協力しながら自由に行うことができました。たとえば、地元の小学校で郷土料理をテーマにした調理実習を実施した際には、テーマ設定から学校との交渉、当日の段取りまで、短い期間の中ですべて自分たちの手で行いました。授業やサークルと違って、義務ではない分、18人のメンバーをまとめるに当たり苦労も

ありましたが、最後までやり遂げられたことは貴重な経験であったと思います。メンバーも活発な人が多く、4年間楽しく活動ができました。

被災地の方々の姿から感じた
地域に根差した生活の素晴らしさ

ゼミでは滋賀の農山村を対象にフィールドワークを行いました。昭和初期生まれの方々のお話を聞いているうちに、その年代ならではの知恵のある暮らしに憧れを抱くように。しかし当時は農山村への移住を判断するには至らず、自分自身の生き方を考えるために大学院へ進学しました。

自分の生活を見つめ直すきっかけになったのが、大学院在学中に起こった東日本大震災です。被災地の様子を自分の目で確かめたいという思いから、ボランティア活動への参加を決意。漁師小屋復建活動のサポート役として、環境建築デザイン学科の学生たちとともに被災地の漁村へ向かいました。ボランティア先では地元漁師さんと学生との仲介や現地での聞き取り調査、さらには仮設住宅に住む人たちと復興支援グッズの作成や販売などを行いました。刺激となったのが被災

地の方々の地元に対する思いです。みなさんは震災によって生活の基盤がなくなった状況でも、地元や自分たちの生業の復興に向けて懸命に活動していました。その姿を見ている



ら」という条件で承諾してくれました。これにより発足したのが「政所茶レン茶」（まんごろちゃれんじや）です。私だけでなく、フィールドワークと一緒に来ていた恩師と受講生、さらにフィールドワーク場所の選定や斡旋に関わっていた東近江市の協力のもと活動を開始しました。地域の方々を含め、全員が結束して始まったこのプロジェクトは、現在も近江楽座の活動の一つとして滋賀県立大学の後輩たちに引き継がれています。

政所茶に隠されたたくさんの方々の魅力

政所茶レン茶では、現地の方々に指導を受けながらお茶づくりを実践。また、地域イベントや広報誌による地域との交流や、政所茶のPR活動などさまざまな活動を行いました。フィールドワークに参加した当初はあまりお茶に詳しくありませんでしたが、活動を通してどんどん政所茶の魅力を発見。特徴の一つが、在来種である点です。現在日本の多くの地域では、利益拡大を目標に茶畑の品種改良が進んでいます。しかしこの土地の茶畑は、昔ながら

と、地域に根差した生活の大切さを実感するとともに、私自身もどこかの土地を愛せる生き方をしたいと考えるようになりました。

「地域の力になりたい」
そんな思いから発足した政所茶レン茶

私が今住んでいる土地、東近江市政所町と出会ったのは2012年頃。大学時代の恩師にフィールドワークのティーチング・アシスタントとして連れてきていただいたことがきっかけでした。この地域で大切にされてきたのが政所茶です。室町時代から代々続いてきた伝統ある特産品ですが、高齢化による後継者不足が問題になっています。子どもたちに苦労をさせたくないという気持ちから都心の学校や職場へ送り出していたことが、結果として地元離れの加速につながってしまいました。

「先祖代々守ってきた文化を自分たちの代で絶やすことは心苦しいけれど、手の施しようがない」。地域のみなさんがそう思い悩む姿を見て、何か協力できないかと考えた私は、政所茶の生産、販売のお手伝いを提案しました。外部の人に土地を貸すというのは大きな決断ですが、地元の方々には「3年間本気で取り組むな

の品種と栽培環境を保っています。お茶の木も、一般的に知られるような畝が整列している状態ではなく、でこぼこしたためずらしい形をしています。また、お茶や果物の栽培には農薬使用が一般的な中、政所茶は産地全体で無農薬栽培をしています。このように魅力的な要素を多く備えたお茶ですが、まだまだ効果的にアピールできていない状況でした。政所茶の素晴らしさを伝えられなまま衰退していくのはあまりにもつらいと感じた私は、もっと深く地域の発展に貢献したいと考えようになりました。

住民として関わっていくために
「茶縁むすび」設立へ

政所茶レン茶の一員として現地に訪れるのは月に1・2回程度であり、できることに限界がありました。そこで利用したのが、「地域おこし協力隊」という行政が実施する地域貢献プロジェクトです。東近江市の最初の実施場所として選ばれたのが奥永源寺地域で、私もプロジェクトに応募。高倍率の中なんとか合格し、第1期生として着任することになりました。地域おこし協力隊としては約3年間活動。政所茶レン茶として現地に通っていた頃以上に、多くの経験が得られたと感じています。それまでも密接に政所に関わる中で、任期終了後もこの土地の住民として地域おこしに携わっていきたく考えるようになりました。そこで立ち上げたのが現在の個人事業「茶縁むすび」です。また、同時期に政所茶

山形さんにつわる



▶ 愛猫「ハク」

保護猫のハクちゃんは大切な家族の一員。ふわふわの毛並みが毎日の癒しになっています。



▶ 家とともに引き継いだ
「背負子」

現在の住まいは茅葺き屋根の古民家です。地域の方からお借りしました。その際、薪を運ぶときに使う背負子をいただきました。昔ながらの文化が詰まった素敵なお家です。



▶ こだわりある食器たち

お茶を扱うからには湯呑や急須は欠かせません。たくさんのお茶にはこだわりが詰まっています。





- CASE -

02

地 繋 人

Sasahara Dai

笹原 大

株式会社モルテン
海外営業統括部
【ドイツ駐在】

滋賀県立大学での学びを活かして
持続可能な社会の実現を目指して
歩み続けたい



生産振興会を設立。この地域には今でも60軒ほどのお茶農家がありますが、そのほとんどは兼業農家です。戦後はサラリーマンとして働きながら、週末に個人でお茶を栽培するのが一般的でした。今後、地域全体で政所茶の発展を実現していくためには組織として協力していく必要があります。その第一歩として、振興会設立に至りました。

懸命な地域おこしで
海外からも愛されるお茶へ



るように、できることを少しずつやっていきたいです。

学生という特別な時間が
大きな成長につながっていく

茶縁むすびでは、政所茶の生産や加工、販売だけでなく、茶摘み体験ツアーや他業種とのコラボ商品開発など、PR活動も行っていきます。また、政所茶レン茶のメンバーや地元の高校生、大学生と一緒にワークショップなどの地域イベントを実施。政所茶レン茶のOB・OGが所属する「政所茶縁の会」のメンバーとも協力しながら、さまざまな活動に取り組んでいます。一番のやりがいは、自分の活動を通して政所茶の盛り上がりや変化を感じること。また、活動に対して、地域の方々から応援や感謝をいただけることも活力につながっています。

現在は年に1・2回、学生を対象に、政所茶や地域活性化をテーマとした講演や講義を行っています。学生との交流を通して強く感じるのが、今の若者は真面目に考えすぎているのではないかと。よく学生から「やってみたくはない」という相談を受けたり、「動いたら良いかわからない」という相談を受けたり。難しく考えるあまり、「とりあえずやってみよう」という行動力がないのではないのでしょうか。

アイデアをかたちにするために、反復練習が大切です。しかし、社会人になると時間や労力をかけることは難しくなります。学生という縛りの少ない状態だからこそ、自由に考え動くことで、0から1を生み出せるのです。私自身、ここまで活動を続けてこられたのは、何事にも臆せず挑戦し続けたからです。行動しなければ、政所茶との出会いもなかったでしょう。ぜひ学生のみならずにも、さまざまな挑戦を通して、インプットとアウトプットをバランス良く行える人間になってほしいです。

地域貢献を通して得たものが
これからの支えになっていく

大学生活の中で、ぜひ地域貢献活動に挑戦してみてください。授業やサークル、部活動ももちろん大切ですが、地域という自分とは異なる価値観をもつ人々がいるフィールドに入ってみると新たな発見がありますし、自然とコミュニケーション力も身につきます。私も地域でさまざまな活動をさせてもらう中で、たくさんの失敗を重ねましたが、その分得られるものは多かったです。大学時代からの活動を通して築いてきたつながりは今でも大きな支えとなっています。

私が学生のときは、先生方をはじめ、周りの方々にたくさんのサポートをしていただきました。現在も滋賀県立大学では近江楽座をはじめ、活動を支援する環境は整っています。学生という特別な時間を大切に、ただかからそでできることに挑戦してみてください。

山形 蓮

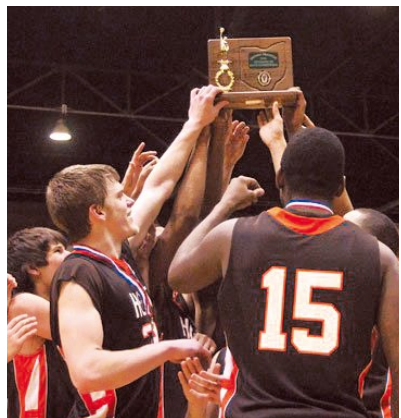
やまがた・れん
【人間文化学部 地域文化学科 2008年度卒業】

大学卒業後の2012年に政所茶と出会う。2014年には「東近江市地域おこし協力隊」第1期生に着任し、政所茶の盛り上げに貢献する。2017年1月に個人事業主として「茶縁むすび」を立ち上げるとともに、同年4月には「政所茶生産振興会」を設立し、地域のつながりを強化しながら政所茶の生産・販売に尽力。茶畑を活用した体験ツアーの開催や他業種とのコラボ商品の開発、講演や講義の実施など、国内外に対して多岐にわたるPR活動を行っている。



新設された国際コミュニケーション学科に
魅力を感じて滋賀県立大学へ

もともと海外に興味があり、高校時代には1年間アメリカに留学していました。現地の高校に入り、自分以外には日本人もいないような環境の中で、現地の生徒と同じように英語を使いながら興味のある分野をひたすら勉強しました。今振り返ると、かなりスパルタな留学だったと思います。ですが、この経験をきっかけに「英語を使ってもっと勉強がしたい」という目標ができました。そして、大学でアメリカの文化や歴史を学びたいと考えていたときに担任の先生が紹介してくれたのが、滋賀県立大学の国際コミュニケーション学科でした。当時はちょうど学科が新しくできたタイミングで興味を引かれたのと、自分のでできること・やりたいことにぴったり合っていたので入学を決めました。



国際コミュニケーション学科は、私が目指していた「英語を使って世界を広げる」を実現できる場所で、英語の力を伸ばせる機会が豊富にありました。それだけでなく、異国・異文化

の人々に対する理解を深めることもでき、私にとって大きな財産となりました。この学科の日本語名は「International Communications」。言葉を知るだけでなく、違う文化、違う背景を持った人とのコミュニケーションを学んでほしい、という思いが込められています。実際に、西洋やアジア、アメリカに関する文化や歴史を扱った講義が豊富で、大学内でさまざまな地域から来た留学生と交流することもできました。

自分から積極的に行動し
多くの学びを得た海外留学

2年次には、アメリカのミシガン州に1年間交換留学をする機会をいただきました。留学生用のプログラムではなく、現地の学生と同じように授業を受け、アルバイトなどにも打ち込みました。

授業はもちろん全て英語だったので、とても大変でした。何とか単位は取れたものの、課題図書を読むのに特に苦労した思い出があります。また、課題やレポートも厳しかったです。たとえば歴史の授業のレポートでは、「事実のみを書く形式にしない」と言われ、一人称の「I」を使っては駄目、代名詞を使わずに固有名詞で書けと教えられます。そんな厳しい制約の中で文章を書くのは初めてだったので、かなり苦戦しました。その経験のおかげで、現在の仕事でメールを作成するときなども、フォーマルな書き方ができています。

課外活動としては、キャンパス内のレストラン

種類豊富な
特別デザインボール

特にやりがいのある仕事の一つが、大会特別デザインボールの提案・販売。商談や打合せ時に使うWeb会議のバーチャル背景も、そのボールをあしらった特別仕様です。



FIBA特別デザインボール

笹原さんまつわる
あれこれ
AREKORE

バスケットボールの
楽しさは世界共通

海外滞在時にはいつも現地でバスケットボールを楽しんでいる笹原さん。現在も仕事の傍ら、ドイツ人のクラブチームに所属しています。日本と海外で大きく違うのが選手の体格。その中で、日本にいた頃とは違うポジションにもチャレンジして活躍しています。



でのアルバイトも経験しました。調理やレジを担当し、職場の人の英語での指示を聞いている確に力がつきました。英語でのコミュニケーション力は、このアルバイトを通じてかなり磨かれました。また、いろいろな経験をしようとして休暇中にシカゴやニューヨークへ旅行にも行きました。自分で飛行機の手荷物を取ったり宿を調べたり。安いホテルを取ったら非常に治安が悪いところで、「こんなところに来るな」とタクシーの運転手さんに心配されることもありました。行ってみないとわからないことがたくさんあり、行動力の大切さを実感できました。

留学の1年間を通して感じたのは、アメリカの学生は必死に勉強しているということ。その姿を見て、とりえず勉強をこなすのではなく、勉強ができるのは恵まれていることと認識し、本気で向き合う姿勢が大切だと学ばされました。

勉学とともにスポーツにも
打ち込んだ学生生活

学生時代は、文武両道でめいっぱい楽しんでいたいと思います。中学時代からずっとバスケットボールをしていて、大学でもバスケットボール部の活動を4年間続けることができました。練習は週3回とそこまで多くはなく、人数の規模も他大学と比べて大きくはなかったのですが、みんなで目標に向けて頑張っていて、とても楽しかったです。毎年夏にあるリーグ戦では、それまで6部だったのが、自分たち

い方向へと導く誘惑に打ち勝ち、人種差別などの障壁を超えて成長していく様子を描いています。私が込めたかったメッセージは「スポーツの力」です。日本にいても人種問題や文化間の衝突についての話題を耳にします。また、それが原因となって金銭的・経済的に恵まれない方も存在するでしょう。そんな中で、スポーツはまっすぐ育つために役立つということを伝えようと思いました。

この小説を書いた背景には、高校時代に海外留学した際の体験も影響しています。現地の子どもたちを見ると、バスケットボールのチームに入っている子は、チームに迷惑をかけるないように振る舞っていました。そのため、非行に走ることなく、勉強にもしっかり取り組んでいました。反対に、スポーツをしていない子たちには、荒れている子が多いように感じました。この経験をきっかけに、私はスポーツには力があると感じるようになったのです。

英語力、異文化理解力を活かして
スポーツに関わる仕事がしたい

就職活動では、中学からずっと続けてきたスポーツと大学で学んだ異文化コミュニケーションを活かした仕事がしたいと思い、自分に合う企業を探しました。その中で出会ったのが株式会社モルテンでした。国際バスケットボール連盟に公式試合球を供給するなど、海外展開に非常に力を入れている会社です。ここでさまざまな国や異文化の人と関わりながら、素晴らしい日本ブランドのスポーツ製

の代で5部のトップまで上がることができました。大学時代に一番仲が良かったのはバスケット部の仲間たちです。卒業後もチームを組んでいて、連絡を取り合ったり、忙しい合間を縫って顔を合わせたっています。

自分の経験や
学びを詰め込んだ卒業論文

その他、大学の学びで印象に残っているのがゼミ活動です。私はクリエイティブライティングを専門とするジョン・リビー先生のゼミに所属していました。このゼミでは、自分の考えや思いを的確に英語で書き記すためのスキルを学べます。講義も卒業論文も全て英語で、英語の力がさらに磨かれました。卒業論文のテーマは少し変わっていて、自分で文学小説を書くというものです。私の思い、自分ならではのメッセージを込めて、50ページほどの文章を書くことが求められました。最初は悩みましたが、自身のこれまでの人生経験を踏まえて、スポーツを主題に据えた小説を書くことにしました。大まかなストーリーとしては、アメリカの貧困家庭で生まれた黒人の子どもが、バスケットの才能を活かして生活を確立していくというもの。スポーツを抛り所として、悪



品をもっと世界に広めていきたいと考え、入社を決めました。

入社後、最初に担当したのはアジアエリアのマーケティング調査でした。具体的には、バスケット大国フィリピンにおいて、どうすれば自社自社のハイエンド商品を広く使ってもらえるか、という作戦を練るための調査です。何度も現地に足を運び、長い時は約3週間も滞在し、自社製品が使用される学校やリーグを回ってヒアリングを実施しました。現地の子どもと一緒にバスケットボールをしたこともあり、みんなコンクリートの上でプレーしていたり、同じボールを5年以上使っていたりと、日本との違いを肌で感じました。そこから、現地ではどのようなボールが求められるのか、ヒントを得ることができました。

マーケティングに半年間携わった後、希望していた海外営業のヨーロッパ担当に配属が決まりました。最初は日本を拠点として海外の代理店や協会とのやり取りを行い、2019年か

県大時代の思い出アーカイブ

大学時代の思い出の数々をお伺いしました

県大の夕焼け

県大の良いところはキャンパスが散歩するのに最適なところ。四季折々、また時間帯によって景色をかえるキャンパスはいつ見ても気持ちの良いものでした。特に夕焼けは本当に美しく、今でも記憶に残っています。



湖風祭

学園祭では一緒に活動している地域の方と出店することもありました。餅つきをしたり、湖魚を販売したりと異色の出店。学生より地域の方に人気でした。



笹原 大さんの思い出



国際自習室

私たちは学科の1期生で、1年生のときは学科生が全員で50名ほど。そのほとんどが休み時間に自習室を訪れていました。課題をしたり、談笑をしたり、おやつを食べたり、すぐ居心地の良い場所でした。



山形 蓮さんの思い出



近江楽座

学部生のときはチームの代表として、その後は学生委員会のメンバーとして関わらせてもらいました。他学部の先輩や同級生、そして先生方と出会えたのは近江楽座のおかげです。

バスケの部室

授業がある日もない日も、一年中通っていた部室。入学時には緊張しながら先輩たちと顔を合わせた、思い出の場所です。現役引退後も練習に顔を出して、後輩達と何気ない話をよくしていました。



体育館

部室ですが、バスケの練習に打ち込んだ体育館も思い出がたくさんあります。夏はとても暑くて冬はとても寒い体育館ですが、練習中はそんなことも忘れるくらい熱中していました。



ヨーロッパへ。現在はドイツに駐在し、スペインやギリシャ、トルコなど担当している8か国の現地代理店とのやり取りや、各競技の協会との面談、契約交渉を英語で行っています。また、出荷に関連する貿易実務や、新商品の発案なども業務内容に含まれています。そもそもヨーロッパには足を踏み入れたことがなかったため、ギリシャに出張したときは、写真でしか見たことがなかったアクロポリスの神殿が常に見える街で商談をしていたことが衝撃でした。

それに加えて、ドイツ販売子会社での調達や管理業務にも携わっています。ドイツ人の営業、マーケティング、経理担当者ややり取りし、本社との連絡や販売計画、在庫管理など業務内容は多種多様。担当者とのコミュニケーションを取る中で、大学で身につけたさまざまな場面で適切に意思疎通を図る力が活かされています。

やり取りを重ねた結果、今まで自社の製品を使っていなかった人々に製品が届き、今までよりも良いと喜んで使用してくれているのを見ると、とてもやりがいを感じます。また、想像できないほどのスケールの数量のボールを販売できたときも気持ちが高ぶります。

2019年のバスケットボールワールドカップの際にはギリシャに250店舗を構えるスー

パーマーケットに大会特別デザインのボールを5万個販売することができ、国中のスーパーの入り口がモルテン一色になりました。ワールドカップを盛り上げ、多くの人に自社のボールを使ってもらうことができたので、非常に良い経験になりました。

スポーツの力を使って社会課題の解決を

モルテンは、スポーツを通じた社会貢献にも取り組んでいます。私が感じていた「スポーツの力」を改めて教えてくれる活動です。例えば、もっと多くの女性がバスケットボールをプレーし、アスリートとして活躍できるように応援する国際バスケットボール連盟が中心となったプロジェクトがあります。その中でモルテンは特別デザイン入りのボールを作り、多様性を尊重するメッセージを発信しています。単に言葉で男女平等を唱えても表面的な受け取り方で終わってしまうかもしれませんが、具体的なものや機会を提供することで、しっかりと問題に向き合うきっかけを与えられると考えています。

他には「マイフットボールキット」という新しい製品も社会貢献を目的としたものです。パズルのように組み立てることができ、空気がなくとも使えるボールで、教育環境が発達していない開発途上国での使用が考えられています。サッカーを楽しむのはもちろん、平面のパーツから立体をつくることで空間把握能力を養える製品で、教育格差の問題にも挑んでいます。

私自身も今後は、ただ値段と製品の質で勝負したものを売るだけでなく、スポーツを取

り巻く課題を解決できるような仕事をしていきたいです。誰もがバスケットボールでできる場を提供したり、上達するためのソリューションを提供したり、少しでも多くの人がスポーツを楽しめる製品やサービスを生み出すことが目標です。一人では成し遂げられないビジネスになるので、周りの人を巻き込み、チームプレーで取り組んでいきたいと考えています。

濃密な時間を過ごせる滋賀県立大学でやりたいことをやり抜いてほしい

滋賀県立大学の魅力は、自然が多い立地で落ち着いて活動に打ち込めること、学生も先生もアットホームな雰囲気の中で学べることだと感じています。ドイツ勤務になった際、一度しか授業を履修したことのないドイツ語の先生から応援メールが届くなど、卒業してもなお距離の近さを実感しています。

そうした環境の中で、学生のみなさんは在学中にしかできない、自分のやりたいことをしっかりとやり抜いてほしいです。勉強や部活動、サークル活動、留学など、何でも構いません。周りの人たちと一緒に、たくさん時間やエネルギーを費やして活動ができるのは大学時代ならではです。社会人になってからも勉強や趣味の時間は作れますが、学生の頃のような濃密な時間の使い方はなかなかできないかもしれません。私の現在のスキルは、学生時代にめいっぱい楽しんだことが源になっていると思っています。みなさんも、後悔のないように大学生活を満喫してください。

笹原 大 ささはら・だい

[人間文化学部 国際コミュニケーション学科 2015年度卒業]

2016年㈱モルテン入社後、アジアエリアのマーケティング調査に従事。その後は営業職を希望し、海外営業としてヨーロッパエリアを任せられる。自社製品を広めるため、現地の販売代理店や各競技の協会との交渉に携わるとともに、新商品の発案などその他幅広い業務も担当。2019年からはMolten Europe GmbH(ドイツ販売子会社)に出向し、製品の調達や管理の業務に取り組む。

